

# 執筆者

## ポール・ケリー（編集顧問）

ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス副学長、政治学教授。著作・編集・共同編集を合わせると11冊にのぼる。専門分野はイギリス政治思想、現代政治哲学。

## ロッド・デイカム

キングズ・カレッジ・ロンドン政治経済学部講師。専門分野は民主主義理論、民主政治、第三セクターと国家の関係。

## ジョン・ファーンドン

科学史・思想史・現代社会の問題に関する著作が多い。科学や環境問題についても執筆を行い、科学図書賞の最終候補者に4回残っている。

## A・S・ホドソン

作家、BushWatch.com.の元編集者。

## イエスパー・ヨンセン

発展途上国の政治・腐敗防止改革に関する助言を得意とする政治学者。ノルウェーのベルゲンにあるクリスチャン・ミケルセン大学のU4腐敗防止資料センター所属。

## ナイアル・キシテイニー

ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで教鞭をとる。専門は経済史・経済発展。世界銀行、国際連合アフリカ経済委員会に所属した経歴を持つ。

## ジェイムズ・ミードウェイ

イギリスの独立系シンクタンク新経済財団の上級エコノミスト。イギリス財務省政策顧問の経歴を持ち、地域開発・科学・革新政策を専門とする。

## アンカ・プースカ

ゴールドスミス・カレッジで国際学を教える上級講師。『革命、民主主義への移行、幻滅 ルーマニアとヴァルター・ベンヤミンの場合 変化する美学』の著者。

## マーカス・ウィークス

哲学を学び、教員を経て、作家となった。芸術や通俗科学についての多くの書籍に寄稿している。

監修

## 堀田義太郎〔ほった・よしたろう〕

大阪大学大学院医学系研究科博士課程修了。専攻は倫理学、政治哲学。東京理科大学講師。論文に「リベラリズムとフェミニズム」（『ジェンダーとセクシュアリティ』昭和堂、2013年所収）など。

訳者

## 豊島実和〔とよしま・みわ〕

東京大学大学院総合文化研究科博士課程後期満期退学。現在、東京外国語大学、昭和大学ほか講師。専攻は英語学。翻訳家。英和辞典編集委員も務める。

# 目次

## 10 はじめに

### 古代の政治思想

紀元前800年～30年

- 20 あなたの望みが善いものであれば、人々も善くなるであろう  
孔子
- 28 兵法は国家にとってきわめて重要なものである  
孫子
- 32 国家のための計画は学識のある人々のみが携わるべきものだ  
墨子
- 34 哲学者が王になるまで、都市は悪から逃れることはないだろう  
プラトン
- 40 人間は生まれつき政治的な動物である  
アリストテレス
- 44 車輪は一輪のみでは走ることができない  
チャーナキヤ
- 48 悪質な大臣が安穏と利益を享受しているようであればそれは滅亡のはじまりである  
韓非子
- 49 統治権はボールのように打ち合われる  
キケロ

### 中世の政治

30年～1515年

- 54 為政者に正義がなかったら政府は盗賊団以外の何ものかというのか  
ヒッポの聖アウグスティヌス
- 56 戦いは忌まわしいものだが義務でもある  
ムハンマド
- 58 人は有徳者による統治を拒む  
アル＝ファラビー
- 60 いかなる自由市民も国法によらずに投獄されることはない  
ジョン王の諸侯
- 62 戦争が正しいものであるためには正しい動機がなくてはならない  
トマス・アクィナス
- 70 政治的に生きるとは良い法に則して生きるということである  
ローマの聖アエギディウス
- 71 すべての聖職者はキリストのように生きるべく努め世俗の権力を手放さなくてはならない  
パドヴァのマルシリウス
- 72 政府とは政府が犯す不正以外の不正を防ぐものである  
イブン・ハルドゥーン
- 74 賢明な統治者は約束を守ることなどできないし守るべきでもない  
ニコロ・マキャヴェッリ

### 理性と啓蒙の時代

1515年～1770年

- 86 はじめはすべてが皆のものであった  
フランシスコ・デ・ビトリア
- 88 主権は絶対的で永続的な国家の力である  
ジャン・ボダン
- 90 自然法は人定法の基礎である  
フランシスコ・スアレス
- 92 政治とは人を結びつける技術である  
ヨハネス・アルトウジウス
- 94 自由とは我々が自分自身に対して持つ力である  
フーゴー・グロティウス
- 96 人間の状態は闘争状態である  
トマス・ホッブズ
- 104 法の目的は自由の保護と拡大である  
ジョン・ロック
- 110 立法権と行政権が同一の人間または団体に置かれる場合  
自由は存在しない  
モンテスキュー
- 112 独立した起業家が良市民となる  
ベンジャミン・フランクリン



## 革命の思想

1770年～1848年

- 118 自由を放棄することは人間であることを放棄することである  
ジャン＝ジャック・ルソー
- 126 一般的な法の原則が幸福に基づいていることなどない  
イマヌエル・カント
- 130 個人の感情は制御されるべきである  
エドモンド・バーク
- 134 財産に基づく権利がもっとも不安定である  
トマス・ペイン
- 140 すべての人が平等に創られている  
トマス・ジェファーソン
- 142 それぞれの民族が自分たちの幸福の核を内包している  
ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー
- 144 政府には悪い選択肢しかない  
ジェレミー・ベンサム
- 150 人民は武器を保有し携帯する権利を持つ  
ジェイムズ・マディソン
- 154 もっとも尊敬されるべき女性がもっとも抑圧されている  
メアリー・ウルストンクラフト
- 156 奴隷は現実世界に存在しているものとして自己の存在を感じる  
ゲオルク・ヘーゲル
- 160 戦争とは手段を変えた政治の延長である  
カール・フォン・クラウゼヴィッツ
- 161 奴隷制なくしてアメリカは存在しない  
ジョン・C・カルフーン
- 162 巨大すぎる国家は最終的に衰退する  
シモン・ボリーバル
- 164 教養ある賢い政府は社会の発展段階に応じて必要なものを理解する  
ホセ・マリア・ルイス・モラ
- 165 「家族」を攻撃するのは社会が無秩序化する徴候である  
オーギュスト・コント
- 168 共有とは盗みである  
ピエール＝ジョゼフ・プルードン
- 184 特権階級の人間は、知性も精神も堕落している  
ミハイル・バクーニン
- 186 もっとも少なく統治する政府がもっとも良い政府である  
ヘンリー・デイヴィッド・ソロー
- 188 共産主義は歴史上の難問の答えである  
カール・マルクス
- 194 共和国を宣言した者は自由の暗殺者となった  
アレクサンドル・ゲルツェン
- 195 我々は国家の中心軸を探さなくてはならない  
伊藤博文
- 196 力への意志  
フリードリヒ・ニーチェ
- 200 重要なのは神話だけである  
ジョルジュ・ソレル
- 202 我々は労働者であるがままに受け入れるべきだ  
エドゥアルト・ベルンシュタイン
- 204 我々の恐るべき隣人を軽視することはラテンアメリカにとって最大の危険である  
ホセ・マルティ
- 206 成功するためには立ち向かうことが必要だ  
ピョートル・クロボトキン

## 大衆の台頭

1848年～1910年

- 170 社会主義は新しい農奴制である  
アレクシ・ド・トクヴィル
- 172 「私」ではなく「私たち」と言おう  
ジュゼッペ・マッツィーニ
- 174 奇抜なことをする人がほとんどいないということが、その時代の大きな危機を表している  
ジョン・ステュアート・ミル
- 182 どのような人間も本人の同意なしに他者を支配できるほど優れてはいない  
エイブラハム・リンカーン

207 女性は殺されるか  
投票権を得るかの  
どちらかである  
エメリン・パンクハースト

208 ユダヤ国家の  
存在を否定するなど  
ばかげたことだ  
テオドール・ヘルツル

210 労働者が  
損なわれてしまった国は、  
手の施しようがない  
ビアトリス・ウェッブ

211 アメリカの保護法は  
恥ずかしいほどに  
不適切である  
ジェイン・アダムズ

212 耕作者に土地を！  
孫文

214 個人は  
決して止まることのない  
機械の一つの歯車である  
マックス・ヴェーバー

## イデオロギーの 対決 1910年～1945年

220 非暴力が私の信仰の第一条だ  
マハトマ・ガンディー

226 大衆のあるところに政治が起こる  
ウラジミール・レーニン

234 大衆ストライキは歴史的必然性の  
ある社会状況で起こる  
ローザ・ルクセンブルク

236 譲歩する人は、自分を食べるのは  
最後にしてくれと願いながら  
ワニに餌を与えている  
ようなものである  
ウィンストン・チャーチル

238 ファシズムの国家という概念は  
すべてを含むものである  
ジョヴァンニ・ジェンティーレ

240 裕福な農民から、  
彼らの存在の抛りどころを  
奪わなくてはならない  
ヨシフ・スターリン

242 目的が手段を  
正当化するとしたら、  
何が目的を正当化するのか  
レフ・トロツキー

246 農民と実業家に  
保障を与えることによって  
我々はメキシコ人を団結させる  
エミリアーノ・サバタ

247 戦争はいかがわしい商売だ  
スメドリー・D・バトラ

248 主権は与えられるものではなく  
つかみ取るものである  
ムスタファ・ケマル・  
アタテュルク



250 ヨーロッパは道徳律を失った  
ホセ・オルテガ・イ・ガセー

252 我々は4億人で自由を求める  
マーカス・ガーヴィー

253 大英帝国との関係が  
断たれない限り  
インドに本当の自由は訪れない  
マナベンドラ・ナート・ローイ

254 主権者とは  
例外状態に関して  
決定を下す権利を持つ者の  
ことである  
カール・シュミット

258 共産主義は帝国主義と  
同じくらい悪いものである  
ジョモ・ケニヤッタ

259 国家は「教育者」と  
みなされるべきである  
アントニオ・グラムシ

260 政治的権力は  
銃身から生まれ育つものである  
毛沢東

# 戦後の政治思想

## 1945年～現在

- 270 制限を受けない政府は  
重大な害悪である  
フリードリヒ・ハイエク
- 276 議会制政治と合理主義政治は  
同じ体制内で  
共存することはできない  
マイケル・オークショット
- 278 イスラムの聖戦の目的は  
非イスラム体制の支配を  
排除することである  
アブル・アッラ・  
マウドゥーディー
- 280 人間から自由を奪うのは  
別の人間だけである  
アイン・ランド
- 282 広く知られ定着している事実が  
歪曲されることもある  
ハンナ・アーレント
- 284 女性とは何か  
シモーヌ・ド・ボヴァール
- 290 いかなる自然物も  
単なる資源ではない  
アルネ・ネス
- 294 我々は白人と  
敵対しているのではない、  
白人の優位性に抵抗しているのだ  
ネルソン・マンデラ
- 296 政治が  
協調の場であると  
信じているのは  
低能な人間だけである  
ジャンフランコ・ミリオ



- 297 迫害に対する闘いの  
初期段階においては  
被迫害者が迫害者へと転じやすい  
パウロ・フレイレ
- 298 正義は社会制度における  
第一の徳である  
ジョン・ロールズ
- 304 植民地主義は  
その本質において暴力である  
フランツ・ファノン
- 308 投票か弾丸か  
マルコムX
- 310 我々は「王の首を切り落とす」  
必要がある  
ミシェル・フーコー
- 312 解放者は存在しない、  
民衆は自らを解放する  
チェ・ゲバラ
- 314 裕福な人々の幸福を  
あらゆる人々が  
保障しなくてはならない  
ノーム・チョムスキー
- 316 この世で本物の無知ほど  
危険なものはない  
マーティン・ルーサー・キング
- 322 ペレストロイカは  
社会主義と民主主義を結合する  
ミハイル・ゴルバチョフ

323 知識人は  
イスラムへの誤解に基づいて  
イスラムを攻撃している  
アリ・シャリアティ

324 戦争の凄惨さゆえに  
我々はあらゆる制約を  
守れなくなっている  
マイケル・ウォルツァー

326 拡張国家が最小国家よりも  
正しいはずがない  
ロバート・ノージック

328 どのイスラム法も  
女性の権利を侵害せよとは  
述べていない  
シーリーン・エバーディー

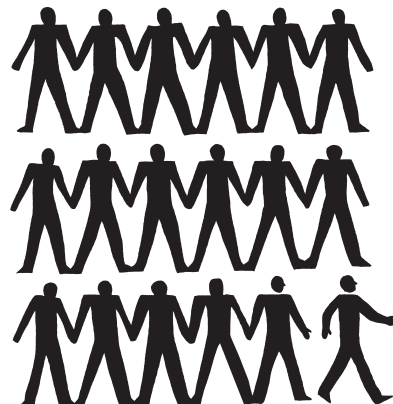
329 自爆テロは  
おもに外国による占領への  
抵抗である  
ロバート・ペイフ

## 330 人名録

## 340 用語解説

## 344 索引

## 351 出典一覧



# 我々は白人と 敵対しているのではない、 白人の優位性に 抵抗しているのだ

ネルソン・マンデラ (1918年～2013年)  
Nelson Mandela

## 背景

イデオロギー  
人種の平等

焦点  
市民的不服従

前史

**1948年** アフリカーナー (オランダ系主体の白人入植者の末裔) 主導の国民党が政権につき、南アフリカにおいてアパルトヘイトが始まる。

**1961年** フランツ・ファノンが『地に呪われた者』において、圧政者に対する武装抵抗を描く。

**1963年** マーティン・ルーサー・キングがワシントン D.C. において「私には夢がある」という演説を行う。

後史

**1993年** 南アフリカにおける和解を追求した功績により、マンデラにノーベル平和賞が授与される。

**1994年** 南アフリカで多人種が参加するはじめての自由選挙が行われ、マンデラが初の黒人大統領になる。

アパルトヘイトは不当な  
人種隔離政策である。

我々はこの不正と不平等に対して  
抗議しなくてはならない。

これはすべての南アフリカ人の  
変化への闘いである。

我々は白人と  
敵対しているのではない。  
白人の優位性に  
抵抗しているのだ。

**南** アフリカ共和国におけるアパルトヘイトとの闘いは、20世紀後期の政治闘争のなかで特に目立つものの一つであった。1948年にアパルトヘイト政策を掲げた国民党が政権についたことにより、少数派である白人による圧政がはじまった。ネルソン・マンデラは、この白人の圧政に対する抵抗運動の先頭に立ち、抗議行動を指導し、アフリカ民族会議の一員として運動を支え続けた。この抵抗運動は、新政府が人種差別政策を導入したことに反対するものであった。1950年代には、人権運動の指導者であるマハトマ・ガンディーやマーティン・ルーサー・キングの影響もあって、多くの人々がアパルトヘイトに反対する運動に参加するようになる。

## 自由を求めて

アフリカ民族会議は、政権を機能不全に陥らせようとさまざまな戦略を考え、市民的不服従・集団就労拒否・抗議活動などを行った。そして、反アパルトヘイト運動に参加していたアフリカ民族会議などの諸団体は、1950年代半ばに自分たちの要求をまとめ上げ、自由憲章として発表した。自由憲章には彼らの要求の中心であった民主主義・政治参加・移動と言論の自由といった事柄が記された。しかし、政府は彼らの抵抗運動を反逆罪とみなした。

参照：マハトマ・ガンディー 220-25 ■ マーカス・ガーヴィー 252 ■  
フランツ・ファノン 304-07 ■ マーティン・ルーサー・キング 316-21

## 抵抗から暴力へ

アパルトヘイト政権に対する抗議運動は、ゆっくりとではあったが確実な効果を上げていた。1950年代には、まだ白人以外の人々には完全な民主主義は手に入らなかったが、多くの政党が、部分的にはあるものの南アフリカの黒人にも民主主義的な権利を与えるべきだと主張しはじめたのである。

このように政治活動に携わる少数派の白人の支持を得られたことは、画期的なことであった。なぜなら、反アパルトヘイト運動は人種の闘いではないのだと示すことができたからである。それは、この抵抗運動によってマンデラが目指す、新しい南アフリカにおける民族宥和の実現という理想とも一致するものだった。この抵抗運動の最大の動機は、人種差別と白人の優越性を排除することであり、少数派の白人を攻撃しようという意図はないとマンデラは強調していた。

アフリカ民族会議は組織をととのえ精神的に活動していたものの、劇的な改革には結びつかなかった。白人以外の人々にまで投票権が認められる普通選挙は、いくら要求しても認められなかった。それどころか、抵抗運動が激化するにつれて、政府の弾圧も徐々に暴力的になっていき、ついには1960



私は白人支配とも黒人支配とも闘ってきた。  
私は自由な民主主義社会の実現という理念を常に掲げてきた。  
ネルソン・マンデラ



年のシャープヴィル虐殺事件が起こる。黒人に身分証の携帯を義務づける法律が成立したことに反対し抗議活動を行った人々に対して、警察が発砲し、69名が死亡するという事件であった。

反アパルトヘイト運動自体もまた、完全に平和的なものであったとは言い難い。ほかの革命家たちと同様に、マンデラも、アパルトヘイト政策と闘うことができる唯一の方法は武装闘争であるという結論に達したのである。1961年、マンデラはアフリカ民族会議のほかの指導者らとともに、同会議内に武装組織ウムコント・ウェ・シズウェ（民族の槍）を結成した。このために、マンデラはのちに投獄されることとなる。このようなことはあったものの、マンデラの市民的不服従運動、および民族宥和の理念は世界中からの支持を受け、最終的にマンデラは釈放され、アパルトヘイト体制の崩壊へとつながった。■

アパルトヘイト撤廃のための闘いは、南アフリカの少数派である白人に向けた攻撃ではない。それは不平等との闘いであり、民族宥和への変化を求める闘いであると、マンデラは述べた。

## ネルソン・マンデラ

ネルソン・ホリシャシャ・マンデラは、1918年に南アフリカのトランスカイで生まれた。父親はテンブ族の首長の相談役であった。マンデラは若いうちにヨハネスブルグに移り、法律を学ぶ。1944年にアフリカ民族会議に入り、1948年にはじまったアパルトヘイト政権の政策に抵抗する活動に参加した。1960年にシャープヴィル虐殺事件が起こったこともあり、1961年にアフリカ民族会議内に武装組織ウムコント・ウェ・シズウェが設立される。マンデラはその設立に尽力した。1964年にはマンデラは終身刑を宣告され、18年間ロベン島の強制収容所に入れられていた時期も含め、1990年まで拘束され続ける。釈放後、マンデラはアパルトヘイト撤廃を求める運動の先頭に立った。1993年にノーベル平和賞を受賞し、1994年には南アフリカの大統領に就任した。1999年に大統領職を退いてからは、エイズ撲滅運動などさまざまな活動に参加した。

## 主著

1965年 『容易ならざる自由への道』  
1994年 『自由への長い道』

# 政治が協調の場であると信じているのは低能な人間だけである

ジャンフランコ・ミリオ (1918年～2001年)  
Gianfranco Miglio

## 背景

イデオロギー  
連邦主義

焦点  
反統一

## 前史

**1532年** ニコロ・マキャヴェッリが『君主論』において、いずれはイタリアが統一されるであろうと予測する。

**1870年** 国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世率いるイタリア軍がローマを占領し、イタリアが統一される。

## 後史

**1993年** アメリカの政治学者ロバート・パットナムが『哲学する民主主義』を出版し、イタリアにおける政治および市民生活に見られる亀裂について論じる。

**1994年** 分離を支持する党レガ・ノルドが、はじめてイタリア連立政府に加わる。

イタリアの政治は対立の歴史であると言える。イタリアは都市国家のゆるやかな連合であった時代が長く、1870年に国家として統一されるまでは、そのような都市国家の寄せ集めとしての歴史を刻んできた。特に、産業の発達した北部と発達が遅れた南部のあいだには長期間にわたり不平等が存在し、争いが絶えなかった。そして全国が統一された際も、北部の人々の多くは、南部は経済的な利益を得られるだろうが、北部にとっては不利益にしかならないと考えていた。

ジャンフランコ・ミリオは、イタリアの大学教授であり、同時に政治家でもあった。彼は、政治の世界における権力構造について研究していた。マックス・ヴェーバーとカール・シュミットの研究をもとに、ミリオは、イタリアの政治資源を中央に集めることに異議を唱えた。そのようなかたちの協調は北部の利益を損ない、北部の人々のアイデンティティーにも悪影響を及ぼすものだと言った。

## 北部分離主義

ミリオは、政治的に協調という路線をとるのは望ましくないと判断し、また、

イタリア北部には自動車メーカーのフィアットなどがあり、自動車産業に支えられて北部の経済は好調であった。その北部が貧しい南部のために資金を出さなくてはならないのは不公平だと、ミリオは訴えた。

政治的市場という観点から見れば不可能でさえあると述べた。イタリアのそれぞれの地域の利権問題は、妥協や議論によって解決できるものではなく、有力な地域には優位な立場が与えられるべきだとミリオは主張した。この思想が支持されたことで彼は政治家への道を歩むこととなり、1990年代にはレガ・ノルド（北部同盟）のメンバーとして国会議員に選出された。レガ・ノルドは1991年に設立された分離主義を支持する急進的な政党である。■



# 解放者は存在しない、 民衆は自らを解放する

チェ・ゲバラ(1928年~1967年)  
Che Guevara

## 背景

イデオロギー  
革命的社会主義

焦点  
ゲリラ戦術

## 前史

**1762年** ジャン＝ジャック・ルソーが『社会契約論』の冒頭に「人間は生まれながらに自由であるのに、至るところで鎖につながれている」と記す。

**1848年** 政治思想家カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスが『共産党宣言』を出版する。

**1917年** ロシア革命により皇帝とその一族が退けられ、共産主義のボリシェヴィキ政権が樹立される。

## 後史

**1967年** フランスの政治哲学者レジス・ドゥブレが、ゲリラ戦術を「焦点化」という理論によって形式化する。

**1979年** ニカラグアのソモサ家一族による独裁政権が、ゲリラ戦術を用いた戦いで倒される。

**ゲ**バラは、キューバやコンゴ(民主共和国)の革命に参加したことから、政治思想家としてよりも「行動の人」として広く知られるようになった。しかし、彼がゲリラ戦術を取り入れたことは、革命的社会主義の発展につながる大きな貢献だった。南アメリカの国々では、アメリカ合衆国の支援を受けた独裁政権のもと、抑圧が強まり貧困が蔓延していた。その状況を直接目にしたことで、ゲバラは、南アメリカの救済は、カール・マルクスの主張した通り、反資本主義

革命による以外はないと考えるようになる。

しかし、マルクスによる経済分析がヨーロッパの資本主義国家と闘うことを意図したものであったのに対して、ゲバラの実践的な革命の解釈は、より政治的で好戦的なものであった。ゲバラは、南アメリカの独裁政権に比べればヨーロッパの国々はまだ紳士的であると感じ、南アメリカの独裁政権を転覆させるには武力による戦い以外に道はないと考えた。そして、革命が成功するような条件がととのうのを待つ

民衆の力によって、  
革命を可能にする条件を  
ととのえることができる。

農村という環境では常に、  
小部隊が有利である。

農村からゲリラ集団による攻撃を開始することで、民衆の不満を煽り、体制に対抗するための人民戦線をつくり上げることができる。

解放者は存在しない。  
民衆は自らを解放する。

参照：カール・マルクス 188-93 ■ ウラジーミル・レーニン 226-33 ■  
レフ・トロツキー 242-45 ■ アントニオ・グラムシ 259 ■ 毛沢東 260-65 ■  
フィデル・カストロ 338-39

民衆のつくった軍が政府軍を倒し、キューバ革命を勝利へと導いた。ゲバラが提唱したゲリラ戦術を用いる方針が、革命成功への鍵となった。

ではなく、ゲリラ戦術を用いてそのような条件を自らつくり上げ、民衆を反乱へと奮起させるべきだと結論づけた。

## 民衆に権力を

『革命戦争回顧録』および『ゲリラ戦争』においてゲバラは、1956年のキューバ革命は、民衆を動員した人民戦線によって成功したのだと述べている。革命とは、解放者が民衆に自由をもたらすというような性質のものではなく、民衆が抑圧的な体制を倒し、自らを解放するものであるとゲバラは考えた。そのような革命の第一歩を踏み出すのもっとも適した場所は、工業化された町や都市ではなく、農村地帯であると彼は述べる。農村においてこそ、反乱軍の武装した小部隊が、政府軍に対して最大限の力を発揮できるのである。この反乱を受けて人々の不満が表面化し、反乱軍への支持が集まり、人民戦線へと発展していく。そしてついには、国家規模の全面的な革命へとつながるのである。

キューバ革命を成功させたのち、ゲバラは、中国・ヴェトナム・アルジェリアでの武装闘争を支援した。さらに、コンゴとボリビアの革命のために戦うが、この革命は失敗に終わる。ゲリラ戦は、革命に関してゲバラが唱えた「焦

点化」理論の核となる部分であった。のちに、彼の思想に影響を受けた多くの運動家が、ゲリラ戦術を取り入れていくこととなる。そのなかには、南アフリカでアパルトヘイトと戦うアフリカ民族会議や、アフガニスタンのタリバンのようなイスラム主義運動も含まれている。

ゲバラは有能な政治家としても知られており、キューバの社会主義政権において大臣を務め、キューバを世界でも有数の社会主義国家に育て上げた経歴を持つ。また、産業・教育・財政に関する政策を策定し、利己主義や強欲といった資本主義社会に見られる性質を排除することに努めた。そうすることで、キューバ国民の解放が促進されると考えたのである。個人的な日記も含め、彼の書き残した書物は、今日も社会主義思想に多大な影響を与え続けている。■

“

すべての不平等に  
憤りで身震いするなら  
あなたは私の同志である。  
チェ・ゲバラ

”

## チェ・ゲバラ

エルネスト・ゲバラはアルゼンチンのロサリオで生まれた。本名よりもチェ・ゲバラの呼び名で広く知られている。彼はブエノスアイレス大学医学部に入学したが、オートバイでラテンアメリカをめぐる旅に出るために、二度、勉学から離れている。この旅で目にした貧困・病気・劣悪な労働状況が、ゲバラの政治思想の形成を促した。

1953年に大学を卒業したのち、ゲバラはラテンアメリカのさらに遠い国まで旅をする。その際に彼は、民主主義を奉じるグアテマラ政府が、アメリカ合衆国の支援を受けた軍によって倒されるのを目撃した。そして1954年にフィデル・カストロに紹介される。カストロとゲバラは、キューバ革命においてともに反乱軍を率い、成功へと導いた。1965年、彼はキューバを離れ、コンゴでゲリラ軍を支援する。その翌年にはボリビアでも戦った。1967年10月8日、彼はアメリカの中央情報局（CIA）の支援を受けた軍隊に捕えられる。そして翌日、アメリカ政府の中止要請にもかかわらず、ゲバラは処刑された。

## 主著

- 1952年 『モーターサイクル南米旅行日記』
- 1961年 『ゲリラ戦争』
- 1963年 『革命戦争回顧録』